■ 編集後記

心臓核医学誌 2013 年の最初の号をお届けします。心臓核医学を巡る環境を振り返ると、1990 年代に続いた新規放射性医薬品の承認、そして gated SPECT を中心とした心機能定量の急速な進歩の時代を思い起こします。1990 年代から米国では大規模研究や多施設研究によるエビデンスの構築が進みましたが、日本でも 2000 年に入って画像領域で多施設研究が進められてきました。一方では急速な CT や MR 等の技術進歩のもとで、冠動脈 CT 件数は既に心筋 SPECT 件数を超えており、核医学が果たすべき役割がどこにあるのかを私たち自身が再評価する必要に迫られています。もちろん、機能や代謝の評価が、予後と密接に関連するという豊富な知見は、核医学手法の根底を支えています。検査方法の最適化という観点が、日本ではまだ普及していませんが、コスト上の観点だけでなく、患者の生活の質の改善に直接結びつく効果的なマネジメントという観点でも、その位置づけが検討される時代に入っているように思われます。

本誌もそのような中で積極的に、心臓核医学の知見や最新の話題を取り上げたいと考えています。本誌の定期的な発行と同時に、電子文書としてのアクセス数も相当数に上りますので、今回の「心臓核医学誌」も含めて Web での公開も進める予定です。編集委員会も定期的な発刊を目指していますが、読者の皆さんからの提案やご意見もお待ちしています。

編集委員会：中嶋憲一